

「親光の福島県 福島県史蹟名勝鳥瞰図」

鳥瞰図とはなにか。それは「高い所から見おろしたように描いた風景図または地図」（『広辞苑』第6版）であり、あたかも空を飛ぶ鳥の目から見たような眺めであることからそう呼ばれる。ほかに「鳥目絵」、「パノラマ地図」、「俯瞰図」などとも呼ばれ、英語では「bird's eye view」という。日本では奈良時代すでに存在した技法で、海外でもレオナルド・ダ・ヴィンチの作品をはじめ広く用いられたようである。

当資料の鳥瞰図の作者は、大正・昭和の鳥瞰図絵師として著名な吉田初三郎である。初三郎は、明治17(1884)年京都市中京区生まれ。「まだ六つ七つの時分から絵のすきな少年であった」(①)という。はじめ友禅の図案制作に携わり、その後「純正芸術を志し」(①)洋画を学ぶ。しかし、一時在籍した関西美術院の院長・鹿子木猛郎かのこぎたけしろうの助言をきっかけに商業美術の世界へ転向することとなり、百貨店の壁画や博覧会の天井画などを手がけるようになる（詳細は①～③）。

そんな初三郎が鳥瞰図絵師として一躍名を馳せる契機となったのは、京阪電鉄の専務から依頼されて描いた沿線の名所図絵『京阪電車御案内』（大正2(1913)年）であった。鳥瞰図としては処女作にあたるこの作品が、沿線に行啓中の皇太子(後の昭和天皇)の目にとまり、「是れは奇麗で解り易い、東京へ持ち帰って学友に頒ちたい……」(①)と称賛されたのである。この後、『京都日出新聞』と『大阪時事』において“大正の広重”として紹介されるに至った(②)。

折しも日本は、明治期以降の産業の発達と一層の近代化が進む中で「新中間層」と呼ばれる高学歴・高所得の市民を生み出し、同時に鉄道がほぼ日本全土をカバーし終えようとしていた。このタイミングの一致が市民の中に旅行ブームをもたらし、これに対応しようとする観光関係の企業や公的機関はこぞって“大正の広重”こと初三郎に旅行案内の挿絵や都市図、絵はがきの作成を依頼した。当資料も、そのような背景のもとで作成されたものの一つと考えられる。

発行者は福島県観光協会。出版年は、本体には記載がないが、③収録の「初三郎鳥瞰図を探す 都道府県別作品目録」によれば昭和12(1937)年とされている。厚紙の表紙がついており、それを開くと内側に「福島県全図」（以下「全図」）と書かれた県内全域を概観する地図が印刷され、さらに、初三郎が手がけた「福島県史蹟名勝鳥瞰図」（以下「鳥瞰図」）が折り畳まれた状態で貼り付けられている。こちらも県内全域を描いており、畳んで表紙を閉じた状態では22×13.2cmという携帯に便利なコンパクトさだが、広げると鳥瞰図だけで長さ106cmになり、そのダイナミックさに驚く。

中心となる県内の描写を見れば、相馬・福島・二本松・郡山・会津若松・いわき・白河などの主要都市がほぼ横並びになり、同時に遙か尾瀬沼の水面が見える。そして最も右端に描かれているのは何かと言えば、青く広がる太平洋と、なんと「函館」という文字。一方左端には同じく太平洋、そして富士山と思しき悠々とした山影と、その向こうに「至下関」の文字。いま仮に飛行機で上空から見下ろしてみても、これと同じ眺めは得られまい。この大胆な歪み＝デフォルメの手法は「初三郎式鳥瞰図」と呼ばれ、彼の作品の特徴として、また最大の魅力の一つとして、初三郎を語る際に欠かせない要素となっている。初三郎本人は、数値的に正確なだけの測量図や平面図は専門的用途以外にはあまり価値がないとし、たとえ数値的正確性には欠けていても、「万人が見て楽たのしみながら解り得べきもの、之れが即ち私の

作品の生命」 「名所図絵の生命は飽^{あく}まで自然を巧^{たくみ}に捕へて、自家薬籠中のものとなし、一目してその美しき山容水態を髣髴せしむる所にあり」 (①) という信念のもと、作品を描き続けたのである。

さて、当資料の魅力的な点は鳥瞰図だけではない。この裏側に、旅行者向けの文字情報が詰まっている。まず「福島県概説」があり、読めば県内の鉄道・街道事情や主な名産品がさっと把握できるようになっている。続いて名所、温泉地、神社仏閣、史蹟、名勝、天然記念物、国宝、城址、山岳、スキー場、海水浴場などのデータが一覧表にまとめられており、様々なタイプの旅行者のニーズに応えられる仕様になっている。全図及び鳥瞰図と併せて参照することで、県内の名所を余すことなく一通り巡ることも可能になるわけだ。

また、出版から75年近く経過した現在におけるこの類の資料の利用の仕方の一つとして、記載内容から歴史を読み解くということが挙げられよう。たとえば、「名所」の欄に「松ヶ岡公園 平市にありて一名平公園と云ふ。…(略)」とある一方、「城址」の欄には「平城址 (石城郡平町)」と所在が記載されている。つまり「平市」と「平町」という呼称が混在しているのである。これは、ちょうどこの資料が出版された昭和12年に平窪村と平町が合併して平市になった(④)ことが背景にあり、「市」がまだ定着しきっていなかったことの表れではないかと考えられる。また、「スキー場」の欄を見ると飯坂にスキー場があったことがわかる。このスキー場、現在すでに閉鎖されている。いつ開業していつ閉鎖されたのか詳しいことはよくわかっていないのだが、この資料から、少なくとも出版当時存在していたことは確認できる。さらに、鳥瞰図及び全図の鉄道の描写を見れば、昭和47(1972)年に廃止された川俣線や、昭和43(1968)年に廃止された日本硫黄沼尻鉄道が描かれていたり、逆に昭和13(1924)年開業の日中線(昭和59年廃業)は描かれていなかったり、只見線が若松から柳津までで止まっていたりする(この先まで延伸するのは昭和16(1941)年以降)。これらを一一つ確認していくと、現在の状況と合わせて当時の県内の景色を具体的に思い描くことができるようになる。これは古い地図資料を見る際の醍醐味であり、また地図というものが歴史を記録する貴重な資料の一つであることの証左とも言えよう。

ちなみに、表紙にも初三郎の絵が使われており、表は磐梯山と猪苗代湖、裏は霊山神社となっている。輪郭線がなく中の鳥瞰図とは異なる素朴なタッチだが、これもまた美しい。

当資料は当館所蔵の他の鳥瞰図と合わせて今年度デジタル化を行い、1枚のCD-ROMでご覧いただけるようになった(資料名:『福島県鳥瞰図一覧』、『観光の福島県』のほか、初三郎が手掛けた『郡山市鳥瞰図』や『相馬市景勝鳥瞰図』を含め計8点を収録)。また、近日中にHPのデジタルライブラリーでも公開する予定である。美しくユニークな景色の数々を、ぜひ気軽に楽しんでいただきたい。

【参考文献】

- ①『如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか?』吉田初三郎/著『旅と名所』創刊号『観光』改題22号、1928.6
※この記事のPDFファイルは京都府立総合資料館HPで公開されている。<http://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/yoshida-index.html>
- ②『吉田初三郎の鳥瞰図を読む 描かれた近代日本の風景』堀田典裕/著(河出書房新社、2009.7)

- ③『吉田初三郎のパノラマ地図 大正・昭和の鳥瞰図絵師』(別冊太陽)(平凡社、2002.10)
- ④『角川日本地名大辞典』7 福島県(角川書店、1981.3)
- ⑤『とうほく廃線紀行』(無明舎出版、1999.12)
- ⑥『都市図の系譜と江戸』小沢弘/著(吉川弘文館、2002.2)
- ⑦『地図出版の四百年』(ナカニシヤ出版、2007.4)
- ⑧『週刊鉄道の旅』東北10(講談社、2003.3)

〈地域資料チーム:河野まきこ〉